

KEEP OUT! KEEP OUT!



ケイヴァーリットの 多世界解釈

Cavorite's Many-Worlds Interpretation.

*As I take man's last step from the surface,
back home for some time to come - but we believe not too long into the future -
I'd like to just say what I believe history will record -
that our challenge of today has forged man's destiny of tomorrow.
And, as we leave the Moon at Taurus-Littrow, we leave as we came and,
God willing, as we shall return, with peace and hope for all mankind.
Godspeed the crew of Apollo 17.*

夢月を臨むブルー・ムーブル

Here men from the planet earth first set foot upon the Moon July 1969 AD.
We came in peace for all mankind.

西暦 1969年7月、我等惑星地球より来たり。
全人類の平和を希求してここに来たり。

[Prologue.]

暦の上でも燕は南に帰り、そろそろ暑さもしのぎやすくなるこの季節。講義をサボって静かにそよぐ風を堪能しながら、薄く汗をかいたグラスから人と氷が揺れるのを眺めるのも、私の中ではひとつの風物詩。

「夢を見たのよ」

いつもの通り学内のレトロ・カフェテリアに向かい合わせて座って、ホーキングフレーバーのミルクティーを前に、メリーはそう切り出した。

私の友人であるマエリベリー・ハーン——通称メリーが、夢の中で『ここではないどこか』を訪れているのは、二人の間ではすでに公知の事実。

物事の結界のほつれを見つけないという彼女の異能の目が、夢の中ではより幻想的に働いているのではないかと私は推測しているのだが、真実は定かではない。

「またいつもの神社？」

「そうじゃないのよ。だからちよつと気になって」

夢の中のメリーの冒険の記録はすでにノート数冊分に及んでいて、秘封倶楽部の重要な活動のひとつだった。聞き手としてではあるものの、私もその冒険を楽しみにしている。

「なるほど。それでわざわざ講義抜け出してまで会いに来てくれたわけね」

「……もう。蓮子だって人のこと言えないじゃないの」

小さく膨れてみせるメリー。これがまた実に可愛くて、まあなんというか最近はこの顔が見たくてサークルしてるんじゃないかなあ、と思うときがあったりなかったりするのだ。

……閑話休題。

これまでメリーが夢の中で訪れた事があるのは、確認できる限り幻想郷と呼ばれる場所に限られていた。けれど昨夜メリーが見た夢は、どうもそうではないものだったらしい。

夢の舞台は、深夜の古びた廃線の駅。

一面のススキに囲まれ、時代からも取り残されたようなところで、メリーがまどろみの中ベンチに腰掛け、来るはずのない列車を待っていた所から始まる。

彼女は、そこで喋るウサギと出会い、話をしたのだそうだ。

「へえ……確かにちよつと幻想郷っぽくないわね」

「わからないわ。場所がいつもの雰囲気じゃなかったって言うだけで、出てきたのは立って歩いて喋るウサギだもの。十分に

幻想的よ」

そう言うと、メリーは頭の上に広げた手のひらをちょこんと乗せる。ウサギ耳のつもりなのだろう。

それにしても、駅に線路なんて、これまでの夢には見られない要素だ。手帳を開いてメリーの気分をそがない程度にメモをとりつつ、先を促す。

「で？ ウサギってくらいだから、お餅をつく杵は持ってた？」

「いいえ。なんていうのかしら、制服みたいな恰好だったわ。

それで懐中時計をこう、首から掛けてて……」

「ルイス・キャロルねえ」

^{ダークアグリー}暗黒物質のように黒い髪、^{ガーネット}石榴石みたいに赤い眼をして、頭

に白くて特徴的な耳をくつつけて。

彼女(?)は、錆びついた時刻表を眺めながらメリーに話しはじめた。

なんでもそのウサギさんは、月の生まれであるのだという。

月にははるかな昔に地上の穢れを厭い、移り住んだ者たちが暮らしていて、彼女もまたそんな月の住人である玉兎^{月の兎}の一人だということらしかった。

「それでその子たちはね、月から来た秘密工作部隊の生き残りだって言うのよ。ずっと昔に起きた地上と月の戦争の時に、地上に降りて来たんだって」

「……ふむ。戦争ねえ」

どうも、あまり穏やかではない話のようだ。

「よく知らないけど、人が月に行ったのって、昔のアポロ計画のことでしょう？ 戦争ってこととは違うように思うけど、そういうもののなの？」

言葉を切って、ミルクテイーに口をつけるメリー。

「……ええと、有人飛行ってことなら有名なのはアポロだけだね。他にもあるのよ」

さてどう説明したものか、と私はメモをとっていた手帳に視線を落とした。次のページをめくりながら、記憶を思い起こす。

「まあ、すごく乱暴に言えば宇宙開発の歴史って、星を標的にしたロケットの射的競争よ。少なくとも単純に、科学的見地と知的興味だけに基づいたプロジェクトじゃなかったはずね。

イデオロギーの対立とか、政治的な思惑とか、そのへんの話をし出すとキリがないけど……誰が少しでも早く、月に近づくか、最初に月にたどり着くか。たくさん^の国が威信をかけて、そのために邁進してた時代があつたの」

“——世界の目から見れば、宇宙での一番乗りはすべてにおいて一番ということだ。宇宙での二番乗りは、何事においても二番手ということなのだ。”

当時、宇宙開発を積極的に推進したある政治家の演説の中に

このような一節がある。その頃の世相を實によく表現した言葉だろう。

「だからアポロの他にも月を目指して行われた計画は山ほどあったわ。失敗したもの、計画だけで実施されなかったもの、そもそも実現不可能だったもの、大小含めればそれこそ星の数ほどね。本気で先に月に着陸した国がそこを征服できるって思ってた人も、決して少なくはなかったみたい」

それまでお互いに向け合っていたミサイルを、ロケットと名前を変えて空に向けた。20世紀後半の宇宙開発はそれだけのことだったのだとも言われている。当時の国家予算の少ない割合をも占めていた計画費用は、軍事分野への転用を意図して振り分けられたものでもあったのだろう。

「そもそも、月に向けて打ち上げるロケットの名前に、^{アポロ}太陽の神様の名前を付けたりするんだもの。侵略の意図がまるつきりなかったとは思えないわ」

「——そうなんだ。本当に戦争だったのね」

空になったミルクティーのカップをテーブルに戻して、メリーは頷いた。

「で、夢の話だけど」

「ええ。その子たちは、地上の侵略から、月の幻想を守るために戦ったんだって言っていたわ」

「侵略かあ……」

人類として初めて月に降り立ち、偉大で小さな一步を刻んだ宇宙飛行士たちは、月面に彼らの国の旗を立てた。それは確かに、地上から月への領有宣言に見えたのかもしれない。

その旗を見て月に住む者たちは恐怖し、驚愕したそうだ。

幻想にとつての月は、人間にとつての太陽のようなものであるらしい。神話や伝承に語られる幻想の聖地へ、^{侵攻の旗}星条旗を掲げて踏み込んだ地上の人間達に、彼等は徹底抗戦を決意した。

月の都で決戦に向けた準備が進められる一方で、月のウサギたちの中からは精鋭が選ばれ、妨害工作のため地上へと派遣されることになった。

決死隊となった彼女達は、幻想を保つ結界の外へ踏み出し、帰還する月着陸船にこっそりと潜り込んで地上にやってきたのだそうだ。

「宇宙開発が蓮子の言うとおりのものだったなら、きっと、あの子たちも驚いたでしょうね」

「そうね。地上の代理戦争を月でやってるようなものだもん」
完全なとぼつちりで自分たちの故郷がロケットの的にされ、挙句には無惨に踏み荒らされていたという事実を、彼女達はどう思ったのだろう。

ともかく。地上の国々が一枚岩でないことを知った彼女達は、そこに付け込んでそれぞれの陣営の対立をあおり、仲たがいをさせ、秘密工作に暗躍した。有名なアポロ13号の事故をはじめ

めとして、月探査計画にまつわるトラブルのうちの何割かは、彼女達月のウサギの工作員が起こしたものののださうだ。

……けれどそんな妨害ものともせず、次々とロケットは打ち上げられた。その頃の月到達計画は、すでに人類の悲願と位置づけられていたから。

人類の侵攻は圧倒的だったという。

次々と飛来する観測衛星、一年と開けずに降下する着陸船、月の砂漠を疾走する月面車。人類の『科学の進歩』が踏み荒らした月からは幻想が失われ、月の住人達はどんどん月の裏側に追いやられていった……らしい。

月を目指す宇宙開発は、国と国との代理戦争であっただけでなく、科学と幻想の戦争でもあったということだろう。

アポロ計画で人類は宇宙人と巡り合うことはなかったが、もし月面で彼等と遭遇することになっていたら、後年の歴史にはどう記されたらうか。

「……確かに、怖がられても嫌われても仕方ないのかしらね」
なんとも微妙な気分のため息をつく私に、メリーは小さく首を振る。

「そうじゃないのよ蓮子。その子たちが本当に恐れたのは、ものと別のことなの」

「別のって、どういうこと？」

「……その子たちは、月がなくなってしまうと思ったらしいの」

意味が分からず、メリーの言葉に瞬きする私。

「月が？」

「人間が、月を残らず地上に持ち帰ってしまうんじゃないかって、恐れていたのよ」

長い耳を夜空に向けて精一杯伸ばし、赤い眼を涙に濡らし、空に輝く月を見上げて。夢の中で、月のウサギはメリーにそう語った。

月を、我が物に。

月の住人たちは、人間達が比喩抜きでそうしようとしているのではないかと危惧していたらしい。

アポロが地上に持ち帰った月の石は、6回の着陸で総計およそ四〇〇kg弱。他にも各国が無人数探査船を含む月探査計画を実行し、月の砂を持ち帰ることに成功している。

月面車を走らせ、研究のために地面を削り岩を砕いて持ち帰るその姿を見て、月のウサギたちは震え上がった。傲慢で強欲な地上人たちは、やがて何十、何百基というロケットで大編隊を組んでやってきて、月を粉々に砕いて地上に持ち帰ってしまうのだらうと。

「……それは、なんとも壮大だね。できるものならジャイアントインパクト以来の大事業じゃない」

三万八千四〇〇キロを隔てた四十億年越しの懐旧。
年毎に3・8センチ遠ざかる月までの距離を、地上人は必死

に繋ぎ留めんと焦がれているのだ——。

……うん。その発想は、どうしようもなく幻想的だ。

「ねえ蓮子。アポロ計画ってたしか途中で終わってるのよね。いつ中止になったの？」

「公式には1972年12月。もともとあった計画のうち、3回の月着陸ロケットが発射されなかったわ」

「なら、あの子たちの努力は無駄じゃなかったのね」

「どうかなあ……確かに月の有人探査は中止になりはしたけど。実際はその後宇宙開発って凍結されてたわけじゃないしね」

それで果たして、実を結んだといえるのか。

いずれにせよ。それと前後して世界構造の変動と共に宇宙開発は大きく減退し、以後数十年にわたって、月は再び未踏の地となる。

「結局、アポロ計画で月を歩いた人類は都合6回の着陸船で12人だけ。大山鳴動して鼠一匹……にしちゃちょっと大きすぎるけど、月のウサギにしてみたらいい迷惑だったのかもね」

いつの間にか氷のなくなっていたアيسスコヒーを、一息に吸る。空になったグラスをテーブルの脇に追いやって、私はメリーに先を促した。

「で、その子つてのはなんでメリーの夢の中に出てきたわけ？歴史の補講でもしに来てくれたのかしら」

「違うわよ。だったら蓮子のほうに行って貰うようお願いし

てるもの」

「……そんな魅力なお話なら歓迎したいけどね」

思わず苦笑。

いやまあ、物理屋にとつて興味のあるところ以外の歴史年表などはあまり意味がない……というのが個人的な心情ではあるけれど。

「その子ね、お友達を探してるって言っていたの。同じように月から地上にやってきて、離れ離れになった仲間たちに、一目でもいいから逢いたいって」

「……そっか。寂しいと死んじやうのは月のウサギさんもおんなじか」

「そうね、蓮子みたい」

「っ、わ、私はそんなことないわよ!？」

まったくの不意打ちで微笑みかけられ、私は椅子を蹴飛ばして立ち上がってしまう。慌てて否定したものものどうにも締まらず、さらにメリーの笑いを誘う羽目になった。

ばつの悪さに帽子を引き下げ、メリーから視線を遮って空っぽのストローをくわえる。

「そうじゃないのよ蓮子。もっと、……切実だったの」

帽子で塞がれた真つ暗な視界の向こうから、硬い、メリーの声音が響く。

「月のウサギはね、確かには月に住んではいるけど、普通の方

法では私達の住んでる地上には降りられないそうなの。幻想で繋がれた場所同士なら、月の——羽衣っていうのかしら？　そういう宝物を使つて行き来ができるそうんだけど、そこに私達はいないでしょう？

だから、ロケットを飛ばす地上人のところにやってくるには、同じようにロケットに乗ってやってくるしかないかったそうよ。

……でも、それからずっと、人類は月に人を乗せたロケットを飛ばさなかったから」

「ああ——」

そうか。

単純な、ことだ。

彼女達は、『決死隊』として、地上にやってきた。それは要するに、もう故郷の月に戻つてこれないという意味だったわけだ。

「その子たちが地上に降りてから、もう何十年も経つていて、仲間たちとはもう連絡も取れないんだって。

探してるっていう友達の子も、とっても寂しがりで、怖がりのウサギだったらしいわ。私と話したウサギさんはその子と一緒に地上に降りるはずだったそうんだけど、その友達の子は作戦の前に逃げ出しちゃったらしいの。それ以来、その子はずっと行方不明だそうよ。

きっと今もその事で自分を責めてるだろうから、気にしないでいいって言つてあげたいって。……月に帰れなくてもいいか

ら、せめてもう一度会いたいって、そう言っていたわ」

月の六倍の重力に引かれて自由に空に飛び上がることもできず、耳を精一杯そばだてて、ノイズだらけの通信の中に、月から響く仲間の声を探し。

三十八万キロの距離を隔てた故郷を見上げ、目を真っ赤に泣き腫らして、懸命に、何度も何度もウサギは跳ねる。

逢いたい、逢いたい、帰りたい。

そう訴え続ける彼女の涙を最後に——

「……そこで、目が覚めたの」

「なるほど、ね」

なんとなくかき上げた前髪をくしゃくしゃといじり、吐息。

中途のままでのメモを放つて、私は手帳を閉じた。メリーの夢はいろいろと興味深いのでこうして記録を取っているが、今日の話はやはりいつもの夢とは毛色が違う。

「なんていうか、重いわね」

「ええ……」

わざわざ講義まですっばかして、メリーが私を呼び出した理由も、きっとこれだ。

自分たちの故郷を守るために、地上に取り残された月のウサギ。——そこにメリーが呼ばれたのは、せめてもの抗議だった

のかもしれない。

「……ありがとう蓮子。聞いてくれて」

「ん、そんな、お礼言われることじゃないわよ。聞かせてくれて言ってるの私の方だしさ」

メリーの表情が少し和らいだので、私も安堵しつつ小さく深呼吸。

「月のウサギか……」

メリーが夢の中で喋るウサギと出会うのはこれが初めてではない。確か前にも、迷路のような竹林で、同じように白兔と追いかけてたり追いかけられたりしたことがあったはずだ。

「ひよつとして、その時の関係なのかもね」

「そうね。……もう少し詳しいことが分かれば、教えてあげられたのかもしれないわ」

メリーは随分気落ちしているようだった。

「ねえ蓮子。あの子たちのしたことって、やっぱり無駄だったのかしら」

「……………」

アポロ計画が終了し、月面の開発こそ一度は途切れたものの、天の星々を観測する活動は地道に続いていた。

そして今世紀初頭には操作重力子の発見により、およそ四〇年を経て人類は再び月の地を踏んだのである。現在では民間の宇宙旅行も実現しており、もはや月は未踏の場所ではない。

彼女達が必死に守ろうとした月の幻想は、泡沫のように失われてしまったのだろうか。

「……私はそうは思わないわ」

何となくではあるけれど、妙な確信があった。

ゆつくりと首を振り、私は自分の眼を指差す。

「だってメリー、私達には常識でしょ？」

「え？」

星を見て現在の時刻が、月を見て現在の位置がわかる私の眼。それは、月なくして存在しえない異能だ。

「月の幻想って、そんなにヤワじゃなかったんじゃないかしら。月のウサギたちの努力をひっくるめて、ね」

“ 地球は青かった。見回してみても神はいない ”

——世界で初めて重力の支配を脱して、宇宙を飛んだ宇宙飛行士はそんな言葉を残したとも言われているけれど。

21世紀初頭からの月探査計画の再燃によって、月の裏側に天使の落書きがない、ということまでも暴かれてなお、月はいく人々を魅了した。

「事実、宇宙飛行士の中には結構な割合で、メリーみたいに夢見がちになっちゃった人もいるみたいなのよ。

当時の人たちにしてみれば、宇宙を飛ぶなんてすごいことだ

し、月に立つて地球^{フレイマール}を見上げるのは天地がひっくり返るようなことだったのかもね」

「……もう、わたしは別にそんなんじゃないわよ」
ちよつと膨れるメリー。ああ可愛いなあ。

「でも宇宙飛行士なんて、科学の最先端の極致みたいな職業よ？ オカルトとは一番縁の遠い人のはずなのに、公式の通信記録にも結構残ってるのよ、胡散臭い報告がね。」

宇宙人を見たとか、UFOと会ったとか、そういうのならまあ分からなくもないんだけどね。

……全世界中継されてる通信でサンタクロースを見たって報告をしたり、地球に戻ってからノアの箱舟を探しに行っちゃったりした人までいるのよね」

古来、月は人を狂わせるとも言う。21世紀まで残り続けた月狂条例^{Lunacy Act}なんて言葉を引き合いに出すまでもなく、その幻想は生き残っていた。

ならば人類史上最も月に近づいた12人の中には、その魔力にあてられてしまった人も少なくないのかもしれない。

「そのせいかどうか分からないけど、前世紀のおしまいには人類が月に立ったことを本気で信じていない人たちもいたみたいね」

「そうなの？」

「ええ。アポロが月に着いてから何十年も経つのに、誰も月に

行こうとしなかったから。人類の月到達は捏造だ、陰謀だって説があつたみたい。著名な学者の中にも、結構本気で支持してる人がいたそうよ。」

……ひよつとしたら、それも月を幻想のものにしておきたいっていう、月のウサギのささやかな抵抗運動だったのかも」
そういう意味では、月の地を踏んだ12人は、まさしく幻想となつてしまったのだ。

月は妖怪、魔の象徴でもある。

私の眼のような力が、いまだに生き残っていることを考え合わせれば、人間の月侵略は阻止されたのだといつてもいいのかも知れない。

「メリー、なんだつたら見に行ってみましょうか」

「なにを？」

「月を、よ。うちの大学にもあるらしいじゃない、アポロが持ってきた月の砂^{レグリス}。あなたの眼で境界が見えるかもしれないわ」
「もう、蓮子^{レグリス}だったら……それで今夜、また故郷を返して、なんて泣きつかれたらどうするの？」

呆れ顔でそう言いながらも、メリーも満更ではなさそうだった。

「よし、決まり。今日の秘封倶楽部の活動は、38万キロの彼方、月世界の境界探索よ！」

帽子をかぶり直し、椅子を引いて席を立つ私に、メリーも立

ち上がる。

ふと見上げた秋の空には、右半分の欠けた白い月が浮かんでいた。

(丁)

※再録に当たり改訂しています
初出:2009/9/22 月の宴2

ケイヴァーリットの多世界解釈

Sir, $(a+b^n)/n=x$, hence God exists. --reply !

閣下、 $(a+b^n)/n=x$ 、故に神は存在する。何かご意見は？

(Chapter.1)

研究室の机に、見慣れない封筒があるのを見つけたのは午後
 になってからだった。

前世紀をはるか過去にして、一旦は猫も杓子も電子化で目の
 目を見なくなった紙^{ペーパー}のやりとりではあるが、神亀の遷都以来、
 情報への霊的守護の研究も進み、紙媒体の再評価が進んでいる。
 電子化犯罪への予防も含め、最近では再び公的な書類は紙媒
 体での使用が進められるようになっていいる。

それでも、手紙という文化はいまや本来の姿を失って久しい
 のだか。

「――残念ながら恋文^{ラブレター}ってわけじゃなさそうね」

色気も素気もない薄緑の封筒に呟きつつ裏返せば、そこには
 実に古めかしい印章。封^{シール}蝋^{ワックス}まで捺された本格的な封印だ。
 差出人の名には見慣れない文字の羅列があった。

「……第六大陸開拓公社？」

S.C.C.P.C.なる英文の略字と思しき組織名の下には、国外の

住所と消印が並んでおり、この手紙が海を越えてきたものであ
 ることが窺える。

さて、心当たりのない名前ではあったが、ダイレクトメール
 の類にも思えない。期待半分——いや、未知への興味と期待八
 割で封筒を破り、中身を取り出す。

納まっていたのは数枚の書面と、国外行きの航空機の手ケッ
 トが二枚。

「こりゃ本格的ね」

正直、誰かの悪戯かと疑っていたのだが、どうもそんな気配
 ではないらしい。少し真剣に意識を切り替え、書面に目を落と
 す。

まず、冒頭に正式な書類であることを示す刻印と認証。続け
 て記された文面はこれが開発公社の名前で起こされた法的手続
 きに基づく文書であることを宣言していた。

「……………ふむ」

なにやら不穏な気配を感じつつ文字をなぞっていくと、実に
 シンプルで機械的な挨拶を挟み、本分はさっさと本題に入って
 いた。

その内容は、私（以下甲とする）と開発公社（以下乙とする）
 の間で所有する資産（以下略）の譲渡契約を前提に、正式に交
 渉のテーブルに着くことを要求しているものであった。

同封の航空機の手ケットは、どうやら私とその弁護士あたり

の渡航費用ということらしい。

さらにこの書類は司法手続きに含められた書類であり、私に応答の意思がなければ強制的な執行も辞さないという一文が付け足されている。つまりは――

「立ち退き命令？」

思わず口に出してしまい、私は慌てて周りを見回した。

幸いなことに研究室の面々は皆、自分たちの作業に掛かりきりであり、こちらに注意を払っている者はいないようだった。

論文から視線を上げた先輩に小さく頭を下げ、私は椅子の上に腰を下ろす。

「……………」

眉間に皺を寄せつつ、読み間違いかと二度三度文面を追ってみるが、どう読んでもそうとしか取れなかった。念のため携帯で翻訳辞書まで通してみるが、さすが法的文書、誤読のしようもないくらいに内容はシンプルで、異議を挟む余地はない。

ということは、これが偽物か盛大な勘違いか、誰かのドッキリでも無ければ、私は誰かに訴えられようとしているというわけだ。

「むう……」

閉じた口をへの字では済まない気分捻じ曲げつつ、二枚目の書面へ。

こちらには私の保有しているという資産がリストになってい

た。英文の馴染まない地番がずらずらと並んでいる。どうやら私の資産とやらは土地であるらしい。

読んでゆくと、そのほとんどが同じ地域に纏まっている。

21. Mare Ingenii | 33.7° S163.5° E318km 234E43
22. Mare Ingenii | 33.7° S163.5° E318km 235E47
23. Mare Ingenii | 33.7° S163.5° E318km 235E48
…

……見覚えのない地名だった。そろそろと並ぶ地番はひと続きであり、購入の時期もばらばら。ただ、どうも隣接する区画を示しているらしいことは把握できた。

「開発公社って言うくらいだから、未開発地域なのかしらね。……にしてもすごい量ねこれ」

リストの最後によると、総面積は四九万六四〇〇エーカー。

「……えっと、確か一エーカーが四〇〇〇平方メートルくらいだから……二〇〇〇平方キロ弱ってどこ？」

……って待て。

「東京まるまるひとつ分くらいじゃない!？」

流石に、椅子を蹴飛ばしての二度目の大声は見逃してはもらえなかったようで、立ち上がった私に、周囲の視線が集中する。

「……あ」

静寂の落ちた研究室の中、集まる奇異の視線から逃れるように、私はそそくさと研究室を後にした。



「……参ったなあ」

色んな意味でばやきつつ、場所をキャンパス内の広場に移し、芝生上のベンチに陣取って。改めて取り出した封筒を確認する。住所の下にはアドレスが併記されていた。端末を取り出して読み取り、検索を試みる。

結果のトップに出てきたのは、確かに実在する公的機関のノードだった。名称も封筒のものと同一第六大陸開発公社となっている。

しかし更新は頻繁ではなく、活動内容の説明も数行でまとめられている程度。信憑性があるような気もする一方で、その気になれば騙ることも簡単に出来そうにも思える。

「『人類の発展と、科学の進歩のために』。第六大陸開発公社、

ねえ……」

公社の理念とやらと一緒に何度もその名前を舌の上で転がしてみるが、やはり身に覚えのないものだった。

法的措置だとかはさておいて（置いていいものでもないが）一番の問題は、私自身が書面にあるような資産とやらに全く心覚えがないことだ。それで立ち退けと言われても困る。

しかし勘違いや良くある詐欺の類で済ませてしまうには少々話が下げさだし具体的だ。

……なによりも。こんな面白そうなことを、単にそれで済ませてしまうのは私の探究心が許さない。

本当ならすぐにでもメリーに相談したいところなのだが、確か彼女は今超心理定弦学の講義のはずだった。連絡はメールだけにとどめておいて、もう一度書面に向き直る。

3枚目以降は、法律に基づいたあれこれの手続き書面らしい。都合5枚以上、あれこれと執行の正当性だの和解を求める書面だの、ややこしい言葉が並んでいたが、理系の人間にはこの類の言い回しは厳しい。読み始めて3枚目であえなく意識を失いかけて、私はベンチの手すりにごつんと頭をぶつけた

「いかんいかん……」

痛む額をさすり、眉をしかめる。

とりあえず斜め読みして確認する限り、要するに開発に必要な土地から私に立ち退けと言っているらしいことは読み取れる。

しかし。

「そんなこと言われたってなあ……」

見覚えのない地番の一覧にどうしたものかとベンチに背中を預け、封筒を透かすように顔の上に掲げる。

そこに透けて見えた『第六大陸』のロゴマーク。
STARCH CONTAINING

「……つて、これもしかして……!!」

その図案化された印章に、私の脳裏をよぎる一つの推測があった。



「……おつかしいな……こつちに持ってきたと思ったんだけど」

収納ボックスをひっくり返し、引っぱり出したファイルから中身をぶちまける。しばしそこを探って手掛かりがないのを確かめては、次へ。床の上に散らばった書類や記録メディアを避けながら、荷物を掻きまわす。

本棚は真っ先に確認して、目当てのものがいないことは判明していた。進学の際に荷物と一緒に放り込んでいた気になっていたけれど、勘違いだったのだろうか。

クローゼットに放り込んだままにしていた段ボールに顔を突っ込んでいるところで、インターホンが鳴る。

かちやり、と合鍵を使って入ってきたメリーは、室内の状況を見るなり眉を潜めた。

「蓮子、一体何の騒ぎ？ 泥棒でも入ったの？」

「ああ、メリー、上がって上がって」

「上がる場所がないわよ」

爪先立ちで床上に散乱する荷物の隙間をよけながら、メリーは私のベッドの上へ。呆れた表情でちょこんと正座する。

「こんな時期に大掃除？ それとも夜逃げでもするのかしら？」

「えっとな」

「えっとね」

私はテーブルの上にある封筒を示し、手短に事情を説明する。

「要するにね、私、月の土地を持つてみたいなのよ」

口に出してみると荒唐無稽な話だ。流星にメリーも、しばらく瞬きをして首を傾げていた。

「蓮子、ひよっとして脳が」

「違うわよっ!!」

いきなり失礼なことを抜かしてくれる親友の頬をむにとつまむ。

「あーもう、四六時中寝惚けてばっかのこの口が言うか、この口がっ」

「んうー、れんこ、いひやいー」

ぐにゅーと伸びるほっぺたはやたらやわらかくてやけに触り心地が良い。くそう胸だけじゃなくてこんなとこまで女の子の子しおって。

メリーの頬から手を離し、吐息をひとつ。

「前に話したわよね。前世紀の宇宙開発競争の時代に、もうすぐ人間が月に移住する未来が当たり前に信じられてた頃の話」
「ええ」

「その頃にね、月の土地の売買なんて商売があつたらしいのよ」
もちろん、実際に月の土地に枠線を引いて切り売りしていた訳ではない。この商売を思いついたのは月旅行の手段すら持たない、ある民間企業だった。

人跡未踏の地を誰のものにするかという争いは、人類の発展と共に続けられてきた。

地上で最後の大陸、第五大陸南極について不干渉条約が結ばれ、世界

のどの国家も個人も所有することができないと定められて以降、人々の興味が天上の星々へと向けられたのは当然の成り行きだったのだろう。

そして、人類の月到達が現実的なものとなり始めていた二〇世紀後半。

アポロが月へと辿り着く3年前に、『Outer Space Treaty宇宙条約』——正式名称「月その他の天体を含む宇宙空間の探査及び利用における

Outer Space Including the Moon and Other Celestial Bodies国家活動を律する原則に関する条約」が国連総会で採択され、2222番目の決議となつて、月はいかなる国家も領有することができないと定められた。
第六篇

しかしこの決議が禁じたのは国の領有のみで、個人が月の土地を保有することを禁じること等は一切触れられていなかった。そもそもそんなことを言い出す相手が出てくるなんて想定されていなかったのだろうけれど——決議に書いていないなら『大丈夫だ、問題ない』とばかりに、月の土地の切り売りは始まったのだ。

「確か、一番立地のいい静かの海では一エーカーあたり\$37.5。Blue Sea安い所だと蒸気Blue Seaの海で\$18.95。当時の物価なら数千円くらいね。お買い得よ」

「……それって安いのかしら。誰も住んでないのに」
「別荘でも建てるつもりだったのかもね。その頃は、あと十年もしたら人類が月に移り住んでる未来が当たり前に信じられてたみたいだから」

さすがにこの事態を看過できなかったか、少し後になって個人を含むあらゆる機関に地球外の不動産の所有を禁止する協定が持ち上がった。

……だが、様々な思惑が絡んだ結果か、そちらは世界で一〇カ国に満たない国しか批准せず、有名無実化してしまうのである。

「ちなみに月の表面積は三八〇〇万平方km。アポロ計画にかかった予算総額で月の半分は買い占められちゃう計算ね」

そうした意味でも、当時の人々が月に並々ならぬ興味を抱いていたことが窺える。

月を足掛かりに火星、木星、そして太陽系を飛び出し広大無辺な外宇宙へと。そこにはかつての大航海時代のような期待があったのかもしれない。

「で、その会社と蓮子が何か関係しているのかしら」

「うーん。まあ要するにさ、当時、月の土地なんて言っても直接行けるわけもなければ見ることもできないわけでしょ？ この商売ってあくまで口約束なのよ。売り買いたって事実があっても、これが不動産として扱われるかは果てしなく疑問だったわけ」

だからこそか。二四目どころか十四も二十四も泥鰌を狙った商売があちこちで立ち上がっていた。

もともと胡散臭さの抜けない商売をさらに真似した訳だから、二重三重の重複決済も当たり前。惑星と一緒に何百光年と離れた恒星の日照権すら売買されていたことまであったという。

実在しないでたらめな数字と地名の書かれた紙切れ一枚に高額な出費を強いられた詐欺まがいの事件も記録に残っている。

そんな中に、今回の権利書が出てくるのだ。

「これよ」

机の上、アルバムの一枚に挟んでいた写真を示し、私は溜息をついた。

フレームの中に収まっているのは初老の男性——背中に抱きついているのは幼い頃の私だ。

「お祖父ちゃんよ。覚えてる？ メリーも一緒にお墓参り、してもらったけど」

「……ああ」

メリーがぼんと手を叩く。

宇佐見景一。——まあ、苗字が目立つので一般的には宇佐見教授で通じる。私の母方の祖父にあたる人物だ。

天文学を志し、研究に生涯を捧げた学問の徒。天体の運行と星命学に関するいくつかの論文と著書があるらしく、天文分野の書籍なんかではそんな風に紹介されたりする。

遷都前の東京の大学で教鞭をとっていたこともあり、専門分野以外にもそれなりに知られていた人物だったらしい。私も大学で教授や先輩から、祖父の話をされることもあった。

「亡くなったのは結構前なんだけど、そのちよっと前にね、プレゼントだって何か渡された気がするのよ。で、気になって調べてみたら、案の定」

「本当に？ 蓮子が？」

「気付かないうちに大地主よね」

目を丸くするメリーに、いやはや、なんとも言えない気分

肩をすくめる。私も自分で日記を読み返すまでは半信半疑だったのだから、仕方のないことではあるけれど。

もともと実在してもいない財産の分与だったため、正式に取り扱われることはなかったらしい。実に常識的な判断だろう。

しかし、どういう具合かこの月の土地の所有権、ある程度正当性のある資産として登録されており、私が資産として所有することにもそれなりに法律に則った手続きがなされていた。

もつともこの手続き自体、今回のように月面開発の問題が立ち上がらなければ気付かれないまま埋もれていたものなのだろうけど――

「海外の企業だから、そのへんの取り扱いが厳密なのかしら。そういう話よく聞くわよね」

「こつちにしちゃいい迷惑よ。確かその時にもらった手紙があったと思うんだけど……小さい頃のことだから、記憶が曖昧でさ」

「それでこの惨状なわけね」

メリーはベッドに仰向けになると、机の上の封筒と書類を、天井の明りに透かすようにして見る。

「どうするの？」

「どう、つて？」

「売っちゃうのかってことよ」

クローゼットを漁る手を止め、私も頭上を振り仰ぐ。

「んー。まあ、今話し合いに応じれば、向こうもそれなりの金額を支払ってくれるらしいし。そもそも見たことも行ったこともない場所の土地を立ち退けて言われても、こつちも居座る気も微妙に無いんだけどさ」

――そう。別段、問題はないはずなのだ。今日の今日まで忘れていた月の土地なんて、こたわる理由はないはず、なのだ。けれど。

「なんか、さ。メリーが夢で見たって言う、ウサギさんのことが気になるのよね」

この時期に、何の意味もなく月に関するメッセージがメリーの夢に現れることが、やけにタイミングの良すぎる話に思えてならない。

月から遠く離れ、
戻ることでもできず、

空の向こうに離れた三十八万キロの彼方の故郷を見上げ、
目を泣き腫らすウサギ達。

何故か。そのイメージが、どうしても頭から離れなかった。
黙り込んでしまった私を最後に、静かな沈黙が落ちる。

「……………」

メリーは何も言わず、私の返事を待っていてくれるようだった

た。手ごたえのないクローゼットの扉を開め、ふうと吐息を一つ。

「ねえメリー。明日から3日くらい、休暇にしない？」

我ながら実に唐突な私の台詞に、メリーは仕方ないわね、と頷いてくれた。

少しばかりの諦めが混じった笑顔と共に。

(Chapter.2)

一面の車窓を、広大なスケールで立体多重映像の浮世絵が流れてゆく。何度見ても飽きないよう工夫の凝らされた全面カラードスクリーン。のびやかな姿も、今はほとんど頭に入らない。

ヒロシゲが結ぶ西京都から卯東京までの53分は旅の感慨を噛み締めるのには短すぎるが、急く気持ちからすればまだまだ長いものだった。

「でも、本当に急よねえ」

「思い立ったが吉日よ、メリー」

そんな事を言いつつも、急な予定にすっかり付き合ってくれているメリー。持つべきものは良き友だ。照れ臭いので口には出さないけど。

目指す先は祖父の邸宅。東京の私の実家からもさらに離れた、北関東の山間の一軒家だった。

もとは親戚の別荘だかを天体観測用に改装した家で、祖母と結婚する前からお祖父ちゃんの住まいだったらしい。在職中は

世界各地を飛び回っていたお祖父ちゃんだが、教授職を引退後は、ここに腰を落ち着けて晩年を過ごしていたらしい。

私がお祖父ちゃんと顔を合わせていたのはいつも、親戚一同が集まる東京の実家だったから、ここを訪れた記憶は幼い頃の数度くらいしかない。

付近にめばしい観光名所もなく、過疎の進んだ集落が、数キロ離れた場所に残っているだけ。ほとんど地図とGPS頼りの道行だった。

「そんなに焦らなくても、お家は逃げないと思うわよ」

「……落ち着かないんだからしょうがないじゃない」

携帯端末で行程を確認している私の横で、メリーがやれやれと笑みを覗かせる。

「どんな人だったの？ 蓮子のおじい様って」

「……そうねえ」

端末を閉じ、顎に指を添えて記憶を巡らせる。

お祖父ちゃんが天文の分野ではそれなりに名の通った業績を残していたのだというのは、自分が大学に入ってから知ったことだ。

学閥には属さず、在野の研究者と積極的に交流を行って、その膨大な資料を整理、統計づけて業績を残したという。天文と星命を関連付ける論文は、遷都の折にも使われる理論の基礎となり、いまでも評価されているそうなのだが——私にしてみれば

ば、星座や月、惑星の話をたくさんしてくれた人、という以上の印象はない。

「小さい頃にしか会ってないんだけど。——そうね、いつも空の話ばかりしてる人だったわ。東京には本当の空があるんだって」

「高村光太郎も形無しね」

霊的守護を張り巡らされた首都圏の京都では、星辰の位置にも正しき導きを得るために、日常的に空に人工の星や星座を補完して安定を保つことがされている。

しかし空気は澄み星々は美しくとも、それは本当の星空ではないのだと、そんなことを教わった記憶があった。

「いろいろな星の読み方を教わって——そう言えば、私の眼のことに一番最初に気付いたのも、お祖父ちゃんだったかなあ」

蓮子の眼は船乗りの眼だと、そんな事を言われたことがある。遠い昔、広大な大海の真ん中にあっても、船乗りは夜空の星と月を見上げて自分の居る場所を知り、今の時間を知ることができたという。

かつて人々が当然のように持ち、そしていまは失われた幻想の眼。そういうものさ。——祖父はそう言って、膝の上に居た私の頭を撫でてくれた。

多分。私が今この道にあるのも、ひよっとしたらお祖父ちゃんの影響が大きいかもしれない

「月の土地を私にくれるって言う話も、その時にしてみたみたいなのよね」

そんな祖父が他界したのは、私がまだ小学校の頃だ。

ひっそりと行われるはずだった葬儀には、国籍も人種も問わず大勢の参列者が訪れ、私はそこでやっと祖父が多くの人に慕われていたということを知ったのである。

「立派な方だったのね」

「どうかな。……親戚の間だと、今どき変人だって言われてる雰囲気だったみたいだけど」

「学問の徒には褒め言葉じゃない、それ」

実家に電話を試みたところ、やはり祖父の遺産のほとんどは手つかずのまま、別荘に残されているらしい。夜遅くの電話にも関わらず、お祖母ちゃんは快く当時のことを話してくれた。

お祖母ちゃん——祖母はほとんど、祖父の研究のことを知らなかった。古風な人だから仕事には口を出さないようにしていたのだとか。

月の土地のことも、一度も聞いたことはなかったという。

「そう言えば、私も調べてみたんだけどね」

メリーが思い出したように携帯端末を取り出す。差し出されたそれは、何かと思えば電子化されたお祖父ちゃんの著書だった。

「論文の方は見つからなかったんだけど、こっちは国会図書館

のアーカイブにあったのよ。落ち着かないなら、着くまで読んでるといいんじゃない？」

「うわ、ありがとメリー。恩に着るわ」

メリーからデータを受け取り、端末を開く。

タイトルは「失われた月」。重々しい装丁の本ではなく、写真を取り込んだシンプルな表紙。天文学というよりも、エッセイめいた宇宙の雑学、という体のものだ。

人々の心より、月が失われて久しい。

……そんな書き出しで始まる文面に、いつしか私は没頭していった。



……。
……。

人々の心より、月が失われて久しい。

過去、空に在る太陰として、太陽の対となり、崇拜され信仰

され、世界中の文化に根付いていた月。

其れが虚構のモノにされてしまったのは、何時のことからだろうか。

本邦に於いてそれはさらに顕著である。

世界各地の神話を紐解いてみれば、多く太陽神と月神は対になって生まれているが、何故か本邦に於いて、月神であるツクヨミの扱いは酷く粗雑だ。

黄泉の國より帰還したイザナギより、アマテラス、スサノオと共に生まれたツクヨミは、三貴子等として一緒に祀られていながら、神話の中に殆どその足跡を残していない。文献に拠ってはその僅かな記述すら、他の神の功績とされる。

いまや太陽の対である筈の月は、何故居るのかも分からぬ程にその存在を希薄にされてしまっている。

人類にとつての歴史、つまり時間の経過を意味する暦と云う言葉の語源は「日読み」——「カヨミ」であるとされる。一方で「ツクヨミ」、つまり月に纏わる太陰暦の衰退は著しい。

これこそ太陽の輝きを崇める人類が、地上より妖怪や幻想、魔法と云う月の領域に住む者を駆逐していったことの証左ではないか。

いまだ、熱かい悩む灼熱の神火に触れる事はできずとも、はより手近な月を、重力に結わえられた岩塊であると見定めることに成功したのである。

時節により姿を変えて定まらぬ月は忘れ去られ、太陽こそが明確な天の支柱で在ると定められた。

かくして人の手の届く場所まで引き下げられた月へ、人類はあの偉大なる一步を踏んだのだ。

いまや世界標準時を定めた唯一の暦が地上を覆い尽くし、人々によって誤差を改められ、厳格に管理されている。

変わることもない暦法が世界を支配し、月よりも遥かに精巧な周期で天を巡る人工の衛星が地上を監視せんと眼を光らせる人類が、地上の何処からでも、己が世界の中心であることを実感できるように。

斯くして月は、この世に不要とされたのだ――。

……。

……………。



「……お祖父ちゃん、こんな研究してたのね」

実家の本棚に著書を見たことはあるが、身内と言うこともあって、積極的に読むようなことはしていなかった。

なんというか、本当に学問を志していたとは思えないような詩的で幻想的な発想。論文ではなく著書なのだから、専門的なものに終始する訳にはいかないのかもしれないが、それにしても、まるでおとぎ話のようだ。

……天の光を全て星と見上げる職業であれば、案外とこんなものなのかもしれないと思わなくもないけれど。

「んっ……」

気付けば随分熱中していたようだ。

いつの間にか、メリーは椅子にもたれ、寝息を立てていた。あまり眠れていないというようなことを言っていたのを思い出した。

「ちよっとお手洗い行ってくるわね」

半分夢の中のメリーに見送られ、席を立った。

車両端のトイレで用を済ませ、ついでに何か飲み物でも調達しようと、隣の車両まで足を延ばすことにする。

(月が失われて、か)

……個人的には、科学が闇を払うという表現は、あんまり好きではない。

実践科学に身を置けばおくほど、世界は不思議に満ちていることを思い知らされるばかりだ。実験技術の粋を尽くし、世界の秘密を解明せんと、あらゆる物事を微小に切り分けて、それでなお科学は多くの謎をこの世に積み上げてしまった。

予算と物理量の壁に実践は廃れ、いまや物理学の最先端は理論の匣の中に閉じ込められている。私たちの世代の研究者の多くが、シミュレーションを含めて観測や測定を行ったことがないというのだから、前世紀には考えられないことだろう。

……神は隙間に潜む、と言う。

人がいかに叡智を誇ろうと、その観測できる事象を増やしていこうと、事象と事象の間、未知、不可知の隙間に潜む存在は消えることはないのだ。

「まさしく悪魔の証明よね」

前世紀の終わりと共に提唱された超統一理論によって、四大力の統合が始まって一〇〇余年。4つの力最弱の重力こそなんとか従えたものの、人類はいまだに太陽系を飛び出してすらない。

悪魔や魔物を滅ぼしても、悪霊に神の不在証明は依然として健在であり、車椅子のホーキングの再来でも起きなければ、理論物理学の発展にはなお百年以上の時間がかかるだろうと目されているのだ。

——と。

他愛もない考えに耽っていたからだろうか。席へ戻ろうとドアを開けたところで、すれ違おうとしていた乗客と肩が触れてしまう。

「あ。ごめんなさ——」

視線を上げ、続けるべき謝罪の言葉の端を、私は思わず飲み込んでいた。

目の間にあったのは、上から下まで、黒で統一された装いの男性客の姿だった。大きな身体は行く手を遮るように立ちはだかり、無言でこちらを見下ろしてくる。

車内だというのに黒のスーツとダツフルコート、同じ色のソフト帽を深々と被り、サングラスで視線を隠す掛けた真つ黒な姿は、まるでカレイドスクリーンに落ちたインクの染みのようだった。

「……あの……？」

何か気分を害するようなことをしてしまっただろうか。尋ねようとした私の周りで、次々に乗客たちが席を立つ。

——彼等は皆、同じ姿をしていた。

「な」

特徴もない、のっぺりしたつくりの顔は、サングラスと目深に被った帽子のせいで表情すら窺えない。

あまりにも異質でありながら、ひとりひとり区別をするのも難しそうな、個性のない姿。

そんな矛盾した風体の『彼ら』が無言のまま、私を取り囲むように迫ってくる。

いや。外見だけなら多少の違和感くらい気のせいで済む。問題なのは、彼らの懐から覗く拳銃だ。

「……………い!!」

ぎよつとして後ずさった背中が、ドアにぶつかってがちゃんと音を立てた。

(な、なに、これ……?)

頭の中で警鐘が鳴り響く。けれど、一体なにが起きているのか、混乱する頭は疑問符を撒き散らすばかりで、答えを返してはくれない。

私はいつの間に、非日常の境界を飛び越えてしまったというのだろう。困惑する私の目の前へ、男の大きな手が伸びてくる。

『間もなく卯東京……卯東京……終点でございます』

硬直していた私を解き放ったのは、ヒロシゲの到着を知らせるアナウンスだった。

「……………ッ!」

後ろ手にドアのロックを外し、私は彼らに背中を向け、転がり出るように元来た方へと走り始める。同時に後ろから、どこかと複数の足音が響き始めた。

(冗談じゃないわよっ!?)

間違はなく、私は追われていた。

背中ではざわざわと騒ぎが広がっては、何かを突き飛ばす音、小さな悲鳴、怒鳴るような声が響く。

それをドアの向こうに遮断するように、ヒロシゲの中を疾走する。すでに車内は下車の準備に席を立つ乗客たちの姿があり、私はいくつもの不満の声を背中に、通路の間を縫うように走った。3両目を過ぎたところで、携帯を引っ張り出してメリーに短縮コール。

(早く……)

緊張と全力疾走で鼓動が跳ね上がる中、呼び出し音の1回が果てしなく長く感じられた。

(早く出てっのに:!!)

どうにか4コール目で通話が繋がる。電話口にメリーが出たときには、背中じゅうに汗が浮かんでいた。

『……どうしたの、蓮子? もう到着するわよ』

「ごめんメリー、荷物お願い!! 改札出てて!! 後で合流するからっ」

『は? ちよつと蓮子、何言って——』

「よく判んないのよこつちだって! 怪しい連中に追われてるのっ! メリーも気をつけて。じゃね!!」

『あ、蓮子!?!』

返事も待たずに通話を切り、ついでに電源もOFFにしてポケットに放り込む。

幸いにして切符はお財布の中だ。ゆっくりと減速を始めたヒロシゲの車内で、疾走を再開した。乗降口へと並ぶ乗客たちを

掻きわけるように、車内をひたすらに走る。

ドア前の列を突っ切るときに肩や手足が触れ、突き飛ばされた乗客たちから次々に文句が上がった。

「ごめんなさいっ、急いでるんで!!」

こんな事態で無ければ礼儀正しくお詫びをしたいところなのだ、こっちはそんな悠長なことをしている場合じゃないのだ。

「……っ、は……っ」

焦燥と緊張に息が上がり、呼吸まで辛くなってくる。

何度か後ろを振り返るが、今のところ黒服達が近付いてきている様子はなかった。大人数だった分、車内を突っ切るのには時間がかかるはずだ。流石に乗客全員を押しのけて走るわけにもいかないだろう。

行く先に彼らの仲間がいないことだけを祈りつつ、懸命に先を急ぐ。

「……………」

辿り着いたヒロシゲの最後尾、到着までの数十秒は、まるで数年のようにも感じられた。

「……着いた……!!」

乗降客でごった返すホームの中、視線を左右に振って『彼ら』の姿が無いことを確認すると、私は手近な階段を駆け降りる。

……ヒロシゲは京都と東京を直通で結ぶ新幹線ゆえに、途中下車というシステムはない。だからあの列車に私達が乗ってい

た以上、卯東京駅で私達が下車することは確実なのだ。待ち伏せの可能性は十分だった。

(メリー、無事でいてよね……!)

あの黒服達が、どこまで知っているのか。

もし彼等がメリーの眼の事まで掴んでいるとなれば、黙って見逃すとも思えない。脳裏をよぎる最悪の想像を振り払い、構内を走る。

弱気になっている場合じゃない。なんとかここであいつらを撒いて、メリーと合流する!!

硬い決意とともに、歯を食いしばって走り続けた。

そこらの人混みから、あの黒服がによつきりと顔を出してきそうな錯覚に怯えながら、売店や通路を迂回して、出来る限りの最短距離で、けれど追跡を避けるように迅速に――

柱の陰から慎重に様子を窺い、全速力で改札を突破……した、その瞬間。

背中から、不意に肩を叩かれた。

「うわああッ!」

思い切り悲鳴を上げてしまい、飛び上がって振りむいたその先には。

「……なによ……いきなり大声……出して」

涙目で耳を塞いでいる、メリーの姿があった。

[Chapter.3]

「……だーからー、しょうがなかったって言ってるじゃないっ。あんな怪しい連中が大勢で追っかけてきたのよ!」

「はいはい、そうね。蓮子は大変よね。なんたって謎の秘密組織に狙われちゃってるんですものね」

「あーもう、見間違いとかがじゃないんだってば。メリーだってあんなつたら同じことしたわ! あいつら鉄砲まで持ってたんだからね……!」

私鉄をいくつも乗り継ぎ、さらに乗り換えたローカル線のバスの中、私とメリーとの言い合いは未だに続いていた。

どういった経緯であれ、私がメリーを放り出してヒロシゲを飛び降りたのは事実であり、メリーが二人分の荷物を抱えて右往左往する羽目になったのもまた事実である。

しかしこれは私にも切迫した事情があつてのことであつて、メリーに荷物を押し付けたと解釈されるのは誠にもって遺憾なのであつた。

「はあ。……もういいわよ。怒ってるんじゃないで呆れてるんだし。今後気をつけてくれればね」

「うー……」

どうみても、お化けを見たという子供に接するお姉さんの対応だったので、私は顔を窓の外に向けたまま口を尖らせる。

「蓮子、貴方疲れてるのよ」

「その台詞、言った人間から誘拐されるのよ?」

こちらの気分も知らず、意地悪な笑顔で冷凍蜜柑を剥きながら言うメリー。冷たそうに蜜柑のひと房を口に運び、んー、と暢気に甘さを堪能してから、

「まあ、蓮子の見たのが仮に見間違いないじゃなかったとしてよ? それで、なんで蓮子が追われなきゃいけないわけ? いまさらわたしたちの結果暴きがバレたって事かしら。……それなら追いかけてくるのは殺し屋じゃなくて警察よ」

「だって……本当なのよ。本当にあいつら……」

「ええ。そうね。そうよね。ひよつとしたら、ヒロシゲの中で革命の相談してるテロリストが居たのかもしれないけど。ほかにいくらでも人気がないところなんてあるのに、わざわざ他の人もたくさん乗ってる、セキュリティだって厳重な新幹線の中で、男の人が何人も揃って同じ黒服の格好でね」

「もお……メリーの意地悪っ。そんな言い方しなくたっていいじゃないのっ」

ふうっと頬が膨らむ。

私だって、冷静な頭で考えればさっきの状況がおかしいものだというのは分かっているのだ。

秘封倶楽部のサークル活動が法に触れる類のものであるのは確かだ、これまでもそれとなく注意を受けたことはある。

しかし、確かにメリーの言うように、それが問題にされるなら、やってくるのはあんな怪しさ満載の黒服集団ではなくて、お巡りさんか司法に任意出頭を求める通知だろう。

「……………でも、追いかけたのは事実なのよ」

「気付かないうちに邪魔でもしちゃったんじゃないかしら？ そうじゃなきゃ、ヒロシゲの案内をして欲しかったとか。大体そんなところじゃないの？」

「うー……。そんな和やかな雰囲気には見えなかったんだけどなあ」

どこかのマフィアが乗り合わせた車両に、たまたま踏み入れてしまったと考える方がまだありそうにも思ってしまうのがなんとも。どっちにしたところでまず起こり得ない偶然ではあるのだけだ。

「それに、もう誰も追いかけてきてる訳じゃないんでしょ？」

メリーの言葉通り、あれから彼等が私達のあとを尾けている様子はなかった。列車を乗り継ぐたび、あたりを警戒している私をメリーは呆れたように見ていたが、怖いものは怖かったん

だからしょうがない。

いまは乗客二人だけのバスで、前後の山道には車どころか人通りすらない。これで気にしろという方が無茶な話ではあるのだ。

太陽はゆつくりと天頂を過ぎ去ろうとしている。

ヒロシゲの切符が9時京都発、という時間だったので、着く頃にはおやつの時間だろう。

ゆつくりと揺れるバスの中、時間をもてあまして、私はつい口に出していた。

「……あのさ、メリー」

「なあに？」

「お祖父ちゃん、なんで月の土地なんか買ったんだと思う？」
それは、私のなかの疑問だった。主義主張はともかくとして、五十万エーカーと一口に言っても、改めて考えるまでもなく広大な敷地だ。

仮にジョークであつたにせよ、特例割引で安く買い叩いたにせよ、東京がまるまる収まってしまう程の広さの土地を売り買いするなんて、なまかな事ではないはずだった。

どれだけ少なく見積もっても、何千万。下手をしたら何億というお金が必要なはずだ。

……少なくとも私は、お祖父ちゃんがそんなに裕福な人だったとは知らない。むしろ、いつも忙しんでいるのに、何年も

背広も変えずにいつも同じ格好をしていたようにも思う。有り体に言えば、貧乏だったはずなのだ。

月を自分のものにしてみたかった？ 他の人に譲りたくなかった？ 想像はしてみても、それが自分の中のお祖父ちゃんの姿と重ならない。

「私にそれを遺してくれたのは、どうしてなんだろうなって」

「きつと、蓮子がこんな、不良オカルトサークルにうつつをぬかすような子になっちゃうって分かってたんじやないかしらね？」

「むうー……」

それを言われると返す言葉がない。メリーは手の中の蜜柑から綺麗に筋を取ってゆく。

「ふふ。でも蓮子といると退屈しないのは確かよね。いつも妙な話ばかり持ってくるし、思い立ったら唐突だし。秘密組織に陰謀に、困った話題にも事欠かないしね」

「だからもういいでしょその話は……」

バツの悪さに帽子のつばを下げ、視線を隠す私。

「……でも、だから蓮子には感謝してるのよ？」

「え？」

「秘封倶楽部に誘ってくれたことよ。楽しいもの。蓮子と一緒にだ。それに、サークルがなければこんな風に、あちこち冒険なんてできなかったと思うしね」

「……………」

呆気にとられた私の唇に、冷凍蜜柑のひと房をちゃんと触れさせて、メリーは微笑んだ。

唇に触れる冷たさと共に、溶け出す甘さが口の中に広がってゆく。

——ああもう。

そんな大事なことで、いきなり言いおつてこの子はっ。

「だからそんなに——って蓮子？ ねえ？」

「メリーい!!」

「きゃあああ!! ちょ、やめ、何いきなりっ……つてどこ触ってるのっ」

「メリー、愛してるっ、大好き——!!」

「離して——っ!!」

……………

……。

……えーと。

感極まってしまった私が悪かったのですが、バスから叩き出されるのにはそんなに掛かりませんでしたとさ。



「は……到着到着……」

ぼすん、と荷物を投げ出して、すっかり固まってしまった背中を伸ばす。

お祖母ちゃんの家は、幼い頃の記憶にあるのとそっくりそのままの姿で、段々畑の広がる山間の一角にあった。森の中の一軒家。3階建てのレンガ造り。屋上にはベランダがあり、伸びた草や蔓が絡まっている。

ドアの門柱には、洒落た字体で「宇佐見」の表札が張られていた。

「随分遠かったわね……」

メリーもだいぶグロッキーの様子。

空はいまや赤らんで、東には濃い藍色、西には鮮やかな橙に彩られ、山間に切り取られた空には紫のグラデーションが揺れている。

「暗くなる前に入っちゃいましょ。もう何年もほったらかしだから、掃除もしないとだし」

遅くなった原因を作った身としては、追及の前に積極的な話題を反らしたところである。

伸ばした手が赤錆びた門に触れると、格子の扉はぎいと軋みながら開いてゆく。ぼうぼうの草を踏み分けるように煉瓦の道を進めば、分厚い檜の扉。

お祖母ちゃんに聞いていた通り、郵便受けの下にガムテープで張り付けてあった鍵を取り出し、ドアを開ける。

ぎい、と開いた奥はすっかり薄暗く、人の手に触れない無言の気配に満ちていた。

そっと靴を脱いでフロアに足を下ろしてみるのが、思いのほか埃は積もっていない。これなら軽く掃除をすればベッドぐらいは確保できるだろう。

「ただいまー」

なんとなく口にした挨拶も、無人の部屋の奥へと溶け消えてゆく。これで返事でもあればますます怪談なんだけど、そんな展開はないらしい。

もちろん、その暗がりの奥から鉄砲を構えた黒服の大男がやってくるなんてこともなく。

「お邪魔します」

丁寧に頭を下げるメリーも後に続いて、とりあえず家の中の様子を見て回ることにした。

リビングの中は一層暗く、思わず手が照明のスイッチを探るが――壁に見つかったボタンに触れても、天井の明りが灯ることはなかった。

当たり前だ。もうこの家に電気は来っていない。苦笑いしつつ、荷物の中からマグライトを取り出して灯りをつける。乳白色の明かりの下、白い布を被せたソファとテーブル、暖炉にクロ

ーゼットという間取りが照らされた。

「……ふむ」

お祖父ちゃんが亡くなってからずっとほったらかしだという話だったから、脚も踏めないくらいに荒れている可能性も考えてはいたけれど、杞憂のようだった。

日に焼けた絨毯を踏みながら、そつと部屋を一周する。

「確か、水道はまだ通じてるはずなのよ。共同井戸だから」

シンクで蛇口から水が出るのを確認する。ダイニングキッチンも一応機能はしているらしい。一応飲み水は持つてきてはいるが、シャワーやトイレもきちんと使えるならそれに越したことはない。

部屋を覗くたび、ふわりと鼻先をかすめる埃の匂いと共に、おぼろげだった幼い頃の記憶が少しずつ形を取り戻してゆく。

もつと背の小さかった頃、見上げていた本棚や家具。いまは高くなった視線からそれを見て、胸の奥が小さく締め付けられるようにも感じられた。

「蓮子？」

「ん。……なんでもない。ちよつと寂しくなっただけよ」

部屋の中はどれも、静謐さと静寂に満ちていた。

人の手が触れなくなった建物は、わずかな時間ですぐに朽ちるという。特段、住人が手入れをしていなくとも、住居とは本来、人がいてこそ成り立つものだ。

家がなければ人が長く生きていくことは難しいように、住人がいなくなれば、その役目を失った家もまた、長くはない。

けれど、お祖父ちゃんの居なくなったこの家は、あの頃の記憶にあるまま、まるで時間が止まったみたいに形を残し続けた。

まだ、自分の役目を終えてはいないのでと主張するように。

「夕ご飯、どうする？」

「そうね。さつき少し食べちゃったし、もうちよつと遅くてもいいかも」

「じゃあ先に寝室の方の確認と片付けしちやおうか。暗くなる前に」

記憶を頼りに階段を上って二階へと向かい、かつての寝室に踏み入れる。カーテンを閉められてそのままにされていた寝室は、寝具もあるせいかな他の部屋よりもすこし埃っぽい。

灯りと共に部屋の中に入って、振り向いた先。寝室の中央には、天蓋付きのダブルベッドが——ひとつ。

「……………」

「あらあら……」

メリーが頬を赤くして口を押さえる。

ベッドに仲良く並んだ枕二つを見て、否が応でも理解せざるを得なかった。

いや。いやいやいや。……なにこれ。なにこの熱々ぶり。ど

うということなの。

少なくとも十年前くらいまでは、お祖母ちゃんもお祖父ちゃんもここに一緒に住んでいたはずで、つまりそれはその、ここで一緒に寝るのが当然の生活だった、ということになる。

着物がよく似合うお祖母ちゃんとこのダブルベッドが全く結びつかず、私は絶句しつつ顔を伏せてしまう。

「仲良かったのねえ。蓮子のお祖父さまとお祖母さま」

「……身内のこーゆうのは色々とアレな気分になるわね」

なぜかほっこりした表情のメリーさんを脇に押しやり、シーツを覆っていた布を外し、外で払ったり、持ち込んだ携帯クリナーで絨毯の汚れをとったりすることおよそ30分。

ほどなく荷物も解き終え、私達は今夜の寝床を確保することになったのだった。

……ダブルベッドで。

「平気よ蓮子、私は気にしないから♪」

「こつちが気にするのよっ!!」



夕飯は持ち込んだコンロで携帯食を温めて済ませることにし

た。水が使えたので固形スープと缶詰めも使えたのが僥倖だっただろう。

「静かね」

「ええ。電波もほとんど入らないし、もつぱらネット接続も有線なのよ。やっぱり天体観測にはそういうの重要らしいわ」

圏外を示す携帯端末をテーブルに放り、窓外一面に広がる夜の野山を見下ろす。もっと虫も居るのかと思っていたが、表で食事してもほとんど気にならないくらい。

交通や通信の不便さえ目をつぶれば、過ごしやすいところだったのは間違いない。

「さて」

おなかもちろに着き、旅の疲れを癒すために熱いシャワーでも浴びて軽くお酒でも——と行きたいところだが、残念ながらうもいかな。ここに来た本題を忘れてしまつては意味がないのだ。

「じゃあ、本格的に探索と行きましょうか」

日程の関係上、明日の午後にはここを出発しなければならぬ。調べ物は出来る限り今夜中にやつておきたかった。

……と、腕捲りして意気込んでみたものの。

お祖母ちゃんが東京に移る時に大半の家具は処分か移動させてしまったため、残っているものなんてほとんどない。探すと言つても場所はお祖父ちゃんの遺品の残してある書斎と、私室

がほぼすべてだった。

書齋には古びた表紙の書籍がずらりと並び、ちょっとした図書館のよう。これでも重要なものは研究室や大学の一つを使って寄付したり配ったりしたそうなので、もとはどれだけ数があったのかわからない。よく見れば地面にも本の格好に絨毯の毛足が乱れ、日焼けの跡ができていたりしたので、往時は部屋いっぱい本が積み上げられていたのだろう。

「……さすがに、こっちは埃が凄いわね」

「蓮子、マスク使う？」

「ん。ありがと」

埃というよりは古書独特のあの匂い。紙魚が残した虫食い跡を避けつつ、メリーと二人、あれこれと本を広げページを捲る。

お祖父ちゃん残したものはほとんどが天文関係の書籍で、丁寧に付箋まで付けられているものがほとんど。私のように思いついたことを端からメモする類のズボラはしていなかったらしい。

「……どう？ 何かあった？」

「……それっぽいのは見当たらないわね」

机の中や引き出しはほぼ整理されて空っぽであり、当時の記録や書類などを探そうとした私達の探索はすぐに暗礁に乗り上げた。仕方なしに本棚の本の中を順番に改めることにしたのだ

本棚から引き抜いて端から積み上げた本の中にも、特にそれらしいものは見つからない。

「随分几帳面な人だったのね、蓮子とは大違い」

「うるさい。……むー。日記とか、メモとか、あると思ったんだけどなあ……」

とうとう最後の一冊になってしまった本を閉じ、ふうと天井を振り仰ぐ。

搜索を始めてはや2時間が過ぎていた。

本棚と机とクローゼット。さらに一階の部屋も含めてあちこち探し回ってはみたものの、結局、私達は書齋にも私室にも、お祖父ちゃんの痕跡を見つけることは出来なかった。

……まさかここに堂々と、遺産の配分表でもあるなんてことは考えていなかったけれど。

なにか、私にメッセージのようなものがあるんじゃないかと、心のどこかでは考えていたのだ。それも甘い想像だったということだろうか。

「はあ。無駄足だったかしら」

「さんざんね、秘密組織にまで追いかけられたのに」

「それはもういいじゃないの……」

ぼやいて背中を本棚にもたせかかる。と。

何気なく見上げた頭の上、本棚の上から薄くはみ出しているものが視界に入る。

「あつた……!」

慌てて一階に駆け降り、脚立を手に駆け戻る。本棚の上に伸ばした手の先に、埃を被った小さな箱が触れた。

こつそりと本棚の上に押し込まれていた箱の埃を払い、慎重に書斎の机の上へ。

「これが？」

「わからないけど、ね」

目当てのものであった時のための緊張半分、やつぱり外れだった時のための失望半分で箱を開ければ、そこには何通もの国際郵便と、

「写真？」

色褪せて古びた封筒から、ばらばらと四つ切の写真が零れおちる。

そこに映っていたものを見て、私は息を呑んだ。

フレームの奥、随分と若い——恐らくまだ二十代だろうと思われる、くたびれた背広姿の男性。おそらくお祖父ちゃんだろう。どこことなく母にも似ていたし、眼鏡がそっくりそのままだ。

問題は、一緒に写っていたもう一人の方。

若き日のお祖父ちゃんの隣で緊張に表情を強張らせる、ブレザー姿の少女。

——その頭には、白くて長い、兎の耳が生えていた。

「……ねえ蓮子、これ……!」

メリーの声も緊張のためか、硬い。

「私達、凄いものを見ちゃったんじゃないかしら」

「そうね……」

思わずぐくりと喉を動かし、何度も瞬きの奥に写真を焼き付ける。

「蓮子のお祖父ちゃん、浮気してたのね……!!」

「そっちかい!!」

思わず綺麗な平手突っ込みを返してしまった。

「だってほら見て蓮子。この親しげな様子、そうとしか見えないわよ!」

「そうじゃないでしょ!?! いやそうだけど!! でもこの場合そうじゃないで!!」

メリーの指摘通り、写真に映るお祖父ちゃんは、精々が三十歳になるかどうかというところ。丁度お祖母ちゃんと出会った頃のはずだ。

いやまあ、正確な年月がわからないとどうしようもないんだけど……

「じゃなくて!! これ、どう見てもあのウサギさんでしょ!?!」
メリーが言ってた、月から来たって言う」

赤い瞳。何かの制服めいた格好のブレザーにブラウス。およ

そ人にはまず見られない、夜明けの瞬間の空のような、透けるような銀色の髪。そして、何故かしわくちやで、ボタンのようなもので留められている長い耳。

人に似た姿こそしていたけど、彼女のそれは変装だとかコスプレだとか、そんなものでは説明できない存在感を持っていた。

「……あ、蓮子、これ裏に日付あるわよ。197×年——」

「いやもうそっちはいいから!!」

「ああん」

思わず計算しそうになった頭を修正しつつ、メリーから写真を取り上げる。

フレームの中、ウサギさんはお祖父ちゃんとの間に微妙な距離をとって並んでいる。メリーの言うことはともかくとしても、ただの知り合いというには意味深過ぎる雰囲気だった。

「うーん。でもねえ、似た格好してるけど、同じ子じゃないわ。

髪の色も、背の高さも違うみたいだし」

メリーが廃駅で話したというウサギさんは黒髪をボブカットにしている、メリーと並んで座っても分かるくらいに背も低かつたらしい。

写真に写っているウサギさんもやっぱり女の子ではあったけれど、背の高かったお祖父ちゃんとの対比からしても、私達と似たくらいの身長はあるようだった。陽に透ける銀髪も、腰くらいまであるように見える。

「じゃあ、ひよつとしたら、その子が話してた寂しがり仲間っていうのが……」

「この子、なのかもね」

メリーも同じことを考えていたらしい。フレームの中で、彼女はどこか周りを気遣うような、申し訳なさそうな、おどおどとした表情を覗かせている。よく見れば手足には少し痛々しい包帯や絆創膏の跡もあって、彼女が訳有りなことは容易に想像がつく。

写真には他にも数枚、彼女が映っているものがあつた。

「そっか。……お祖父ちゃん、月のウサギさんと逢つてたのね」
驚きももちろんあつたけれど。心のどこかでは、やっぱり、
という思いが強かつた。

……口に出すことは、躊躇われはしたけれど。

ずっと昔から、お祖父ちゃんは、幻想の存在が実在することに、半ば確信を持っていたのではないかと思えてならなかつたのだ。

「まだ写真、あるみたいね」

メリーに促されて、封筒の中身を見てゆく。ほとんどはこの家の周りの自然風景や星を撮った素人の風景写真だったけれど、たまに他の人が映っているものがあつた。大学のキャンパスらしき場所や若い学生に講義をしているものや、海外の研究会か何かだろうか、大勢の人たちに囲まれたお祖父ちゃんが、にこ

やかに庭でバーベキューをしているものもあった。

ひよっとしたら、お祖父ちゃんのお葬式で見た人たちの中にも、この人達が居たのかもしれない。

ウサギさんをフレームにおさめた写真は全部で5枚。ざっと見るに、全部夏と思しき青々とした緑が映り込んでいる。

「そんなに長い時間、一緒に居た感じじゃないわね」

「そうね、これなら過ちが起きた可能性も低いかしら」

「なんでもその方向に持つてこうとするのやめてくれないかしら、メリー」

ジト目で釘をさすも、メリーは意外そうに眉を潜め、

「蓮子は気にならないの？ ひよっとしたら、蓮子も月のウサギさんの血を引いてるのかもしれないのよ!」

「……さらっと何を無茶苦茶な事をおっしゃってくれやがりますかこの娘さんは」

深く追求するとなんか物凄く落ち込みそうな気がしたので、メリーの妄言は聞き流すことに。

「ほら、うさみみなんて名字だし」

「人が前向きに忘れようとしているのに容赦ないわね!!」
つてか代々その苗字なんだけどね我が家の人間は!!」

取り合うのはやめにして、写真に視線を戻す。

最後の一枚は、夜空の下に立つウサギさんの背中を捉えたものだった。

「……これ……」

夜空には大きな赤い月が灯り、彼女は電波の届かないこの寂れた山間から、怯えながらも必死になつて月を窺っている。

過去を切り取った写真の中で、まるで彼女は月を見上げて泣いているかのようにも見えた。

その子は寂しがりで、臆病だった。だから戦争が始まる前に、仲間を放り出して月を逃げ出した――

メリーのしてくれた夢の話の思い出し、思わず口を噤んでしまふ。大きな月の浮かぶ空の下で、小さなその背中が、まるで重責に押し潰されんばかり。

そつと写真を置き、他の封筒に手を伸ばした。

「……………」

英文の住所を眺め、宛先を確認する。封筒の中身は、どうもお祖父ちゃんがあちこちの友人とやり取りをした手紙らしい。かなりの数のあるその内容は、消印や切手から、世界中に向けて送られたものであるようだった。

その内容はひとつ。

ある日、突然お祖父ちゃんの家へ転がり込んで来たという、月のウサギさんについての話。

信じられないことに、彼女は人類の侵略によって故郷を脅かされ、ここに逃げのびてきたのだという。

——どうだろう、諸君。

ここはひとつ、この寂しがり屋の月のウサギの故郷を守るために、僕らで月を買い占めてやろうじゃないか。

彼女の住んでいたという、月の裏側にある土地を。

皆でありつたけ買い占めてしまおうという、壮大で、馬鹿げた、荒唐無稽な企画。

お祖父ちゃんはそのを、世界中に向けて、真顔で訴えていたのだ。

「……月の裏つて、文字通りの意味じゃないと思うけどなあ。お祖父ちゃん」

苦笑とともに、そんな言葉が口をついていた。

[Chapter.4]

ベランダから身を乗り出せば満天の星空の下で。
しばらく手入れもされていなかったにもかかわらず、木造りのデッキは軋むことなく引つ張り出したチェアを支えている。
青い炎をともしコンロの上、ポットがかたかたと小さく蓋を鳴らしていた。

手摺に頬杖をついていた私を、背中からメリーの声が呼ぶ。

「蓮子、珈琲淹れてみたけど、飲む？」

「……ん。そうね」

現れたメリーから、熱いカップを受け取った。

火傷しそうに熱い黒褐色の液体をそっと口に含めば、心地よい香りと程好い苦み。ぼんやりとしていた頭を覚ますカフェインの味。

珈琲の味を堪能しながら、傍らの白い天体望遠鏡を見上げる。
お祖父ちゃんの部屋の隅で埃を被っていたそれは、今から見ればもう骨董品と言っていいくらいに古いものだ。衛星とリン

クするでもなく、ネットに接続されているわけでもない
旧式。
アンワイヤード

別れの挨拶もなく『彼女』が居なくなつた後も、お祖父ちゃんはずっと、このレンズの向こうに月を見上げていたんだろう。
「蓮子のお祖父様は、月の幻想を守るためにあんなことをしてたのね」

「そうね……いやはや、壮大だわ」

箱の中に納められていた手紙やメールの写しから、以後の経過も、断片的にだけ調べる事ができた。

月のウサギの故郷を守ろう——

初めは出来の悪いジョークと受け取られていた宇佐見教授のメッセージは、まるで空の彼方に話相手を探すように、何年も時間をかけて少しずつ広がっていった。

十年が過ぎ、二十年が過ぎて——いつしか、お祖父ちゃんの企画には、多くの賛同者が集まった。

名乗り出た人達の中には、アマチュアの天体観測グループから、私でも知っている有名な天文台の名前まで上がっている。

その数は数百、数千にも及んでいた。

かくして、お祖父ちゃんとその仲間達は、月の裏側にある賢者の海に総計八〇〇〇万エーカーもの広大な土地を買い占めたのだ。

彼等はさらに数年をかけて法務局や弁護士の手を奔走し、た

だのジョーク商品でしかなかった月の土地の権利書を、少なくとも公的な取引において無視できないような、正式な契約へと昇華させる。

私の元に至る五〇万エーカーの月の土地は、こうした企画の一端だったのだ。

「酷い話よ。こんな悪戯に、世界中を巻き込んだじゃってさ」

——少なくとも。お祖父ちゃんのしたことは、科学者として褒められることではないだろう。

月を買わせた男。宇佐見教授の評価にはそんな名前もあり、一時はイグ・ノーベル章の候補に挙がったこともあったという。

著書のいくつかはこの活動のために発刊されることになり、研究者の間では科学者としての評価に傷を付けた、という批評もあった。

……けれど。

「……………」

カップを傍らにどけて、望遠鏡のレンズの中をそっと覗き込む。

三万四〇〇〇キロの彼方、空に浮かぶ月の表面には、いくつもの凹凸を刻む山脈とクレーターが見えた。

——あの月には何があるんだろう？

それは恐らく、人類が空を見上げて最初に抱いた疑問だったのだろうと思う。

岩塊と砂の散らばる荒野の大地か、穢れを知らぬ天上人たちの住む樂園か。それを確かめるには、どんなに大きな望遠鏡を作っても足りなかった。

そんな時代に、月に何を見るのかは、きっとその観測者によって違っていたのではないだろうか。

月の上に住むものが、ウサギではなく蟹だったり、獅子だったり、乙女だったりしたように。

なんのことはない。光ですら一秒も遅れて届く距離に隔てられて、レンズの向こうにも映らない月の大地に恋焦がれているのは、人間だって同じだったのだ。



「……………ん？」

感慨に浸っていたところで、ふとなにか違和感を感じ、視線を空から下へと引き戻す。閑散とした山の中、周囲に灯りはなく、深い闇のなかに木々の陰影が沈んでいる。その片隅に、ちかりと灯るライトの明かり。

「……ちよつと」

わけもなく意識の奥が冷えていくような感覚。

まさか、気のせいだろう。しかしその疑念を晴らす前に、まるで夜闇に溶け込みそうな、真つ黒なバンが木々の間から滑りだしてきた。

山道を走ってきたというのに泥跳ね一つない車体から、コピー&ペーストしたみたいに同じ格好の黒服姿が姿を現す。

同時に、インターホンが鳴り響いた。

「あら、お客さん？」

「……メリー、待つて!!」

階段を降りようとしていたメリーを、慌てて呼びとめる。メリーはあのねえ、と腰に手を当てながらこちらに振り向いて、

「まさか蓮子、まだ秘密組織がどうこうって話引つ張つてるの？ ねえ、想像の中でなら面白いかもしれないけど——」

「伏せてっ!!」

ほとんど悲鳴のように叫んで、掴んだ彼女の身体を引き寄せる。どき、とベランダの脇に重なって倒れ込んだメリーがむぎゆ、と可愛らしい悲鳴を上げた。

手を伸ばし、机の上にあった照明灯の明かりを落とす。

ベランダのデッキボードの上、メリーはなぜかほんのりと赤く染めた頬を押さえ、

「蓮子？ あの、ちよつと、事に及ぶのが急過ぎると思うの。」

ここ、外だし……私まだシャワーも浴びてないから——」

「そうじゃなくて!!」

よく分かっているらしいメリーに思わずツツコミをひとつ。と言いか何を想像してるのかこの娘さんは。

「あのね。良く聞いてメリー。ここの事ってほとんど誰も知らないのよ。近くに住んでる人たちは、お祖父ちゃんが亡くなつて、お祖母ちゃんが引つ越す時に挨拶回りしたし。こんな夜中に誰かが訪ねてくるってこと自体、滅多にないはずなの」

「……誰か、道に迷った人とか？」

「普通、そういう人たちって門が閉まつてたら乗り越えてきたり、こじ開けたりしないんじゃないかしら」

言うが早いのか、がんばるとドアを叩く音が響く。ノックと言うには余りにも激しく、そのままドアを打ち碎いてしまいそうな勢いだった。

「よっぽど困ってるのねえ」

「それ本気で言ってるんだつたらちよつと尊敬するわ、メリー。だいたいね、ここ電気来てないのよ？ なんでインターホンが鳴るわけ!？」

ぼやいて頭を掻いた瞬間。どかん、とまるで小さな地震のような轟音と衝撃が階下から響き、がくと建物全体が揺れ動く。遠慮のない足音がそれに続いた。

そう、ちよつと、ドアを押し破った何人もの人間が、土足で

玄関に踏み入ってきたような。

「……………」

「……………」

さらにダメ押しのように、ばんばん、と乾いた平手打ちのうな音が立て続けに轟く。

一応、法治国家であるわが国では聞こえちゃいけないはずの音色であった。

「……分かった？」

「うん、ごめんなさい蓮子」

「よろしい」

お互いに身体を寄せ合ったまま顔を見合せて、私達とはりあえず意見の一致をみた。

「……参ったわね。秘封倶楽部結成以来の大ピンチじゃないかしら、これ。私達、いつからサスペンス映画に入り込んだんじやったのよ？」

「このシチュエーションはホラーかなにかじゃない？」

「どっちにせよ配役には大いに問題アリね」

できれば華麗にハリウッドアクションと行きたいものだが、どうもそんな悠長なことを言っている余裕はなさそうだ。階下を物色する物音は止まらず、間もなく『彼ら』はここまでやってくるだろう。

「ねえ蓮子。今なら多分、あなたが脈絡なく前世の記憶とか伝

説の力に目覚めちゃっても展開的に大丈夫だと思うわ。なんなら目閉じてるから、私」

「——メリーこそ、遠慮しないで隠してた秘密の力であいつらを一扫してくれてもいいのよ？」

しばしじつと目を見つめ合わせ、お互いに溜息をついた。

部屋の中に何かないかと視線を巡らせ、ベランダの隅に転がっていた箒を拾い上げる。こんなもので太刀回りなんてするつもりはないのだが、手元になにかあるとないとでは安心感が違う。

「メリー、気をつけて」

背中に彼女を庇うように、箒を握り締める。

ぎしぎしと階段を昇り、まっすぐにこちらを指してやってくる足音に息を潜めた。

「……………」

張り詰める緊張と共に、汗の浮いて気持ちの悪い背中を震わせ、ごくりと唾を飲み込む。

不意に、ぱあっと視界が明るくなったのはその時だった。

「え」

振り向いたベランダから、突如の風が吹き付ける。二つの回転翼をはばたかせ、真っ黒なヘリコプター上空をホバリングしていた。強力なサーチライトが瞬き、部屋の中に私達の姿を浮かび上がらせる。

「んな……っ」

空を切るローターの凄まじい轟音が耳を打った。

反射的に耳を塞いでしまった私の目の前で、ドアがこじ開けられ、身長2mはあろうかという上から下まで全身黒づくめの
大男が姿を現す。

早秋の季節には似合わない、目深な帽子に分厚いダツフルコート、さらにはサングラス。男の手には大きな拳銃が握られており、その銃口がびたりとメリーの方に向けられる。

「メリー!？」

叫ぶも、メリーは目の前の事態についていけず、身体を強張らせるばかりだった。

ゆつくりと男が引鉄に指をかけ――

鳴り響いた銃声は、ふたつ。

サーチライトの揺れる明かりの中、ゆつくりと黒服の男が腕を押さえてうずくまる。

「え……?」

瞬間、視界がまるで血みたいに真っ赤に染まった。耳の奥がわあんと重低音に包まれて、思わず目を閉じかける。

同時にシャボン玉が弾けるような音を響かせて、カラフルな弾幕が闇の中に光条を灼き付けた。

いくつもの光の弾丸に打ち抜かれて、男が吹き飛ぶ。

「早く逃げて!!」

鋭い声が、私を呼んだ。

「え、」

「ほら、早く!!」

呆けたような声を返した私の背中が、どんと強く突き飛ばされる。たたらを踏んで倒れそうになったその先に、床にへたり込んでいるメリーの姿。

「――つて、メリー!？」

力なく座り込むメリーの腕を掴んで、手元に引き寄せる。キョトンとしているままの彼女の身体をまさぐって、異常が無いことを確かめた。

「メリー! 大丈夫!? 怪我してない!？」

「う、うん。平気みたい……」

困惑の中で頷くメリーを見て、ようやく意識に余裕ができた。

「れ、蓮子……?」

目元に涙を浮かべているメリーの、震える手が。

私の意識の、辛うじて残っている部分を奮い立たせる。

「ごめんメリー、文句は後で聞くからっ」

「きゃ!？」

メリーの手を握り、倒れた男の身体を迂回するようにしてベランダへと走る。ドアの奥からはまた新たな黒服が姿を見せよ

うとしていた。

ローターの轟音が巻き上げる暴風の中、サーチライトが投げ下ろす光の輪を避けるように、ベランダの端へ。

「行くわよ!!」

「行くってどこへ!？」

「逃げるのよ!!」

叫んで、メリーの身体を抱え上げるようにベランダの手摺りに脚をかけた。

「ちょっと、蓮子、正気!？」

「あんな連中に捕まってるんじゃないでしょ!？」

「だって——この前2キロ痩せたって、アレ嘘よ!？」

こんな時までどこかズレた悲鳴を上げるメリーさんを思い切り抱き締め、一瞬だけ躊躇してから。一息にベランダの柵を乗り越えた。

「きやあああああああああああああああああ!？」

メリーの悲鳴をあとに残して。

せめてこの夢が、少しばかりヒロイックアクション好みの要素を持っていていきますように、と胸の中で三度お願いをして、庭の植え込みへダイブした。

べきべきと梢を押しのかけて、着地の衝撃が頭を揺らす。

「……痛ったあ……」

お尻に響く衝撃に顔をしかめながら、目を回しているメリーの肩を揺さぶった。

「メリー、寝てないで起きて!!」

「う……」

幸か不幸か、3階からのダイブにも関わらず奇跡的に擦り傷程度の被害で済んだようだ。手も足もお尻も背中も、あちこちがひたすら痛い、動けないことは無い。

緊張に膝が笑い、まだ心臓が張り裂けそうに高鳴っていた。

乙女二人分の体重を受け止めてくれた庭の植え込みから這い出して、周りを見回す。

頭上には相変わらず、地上に白い光の輪を投げ下ろすヘリコプターが旋回を続けていた。揺れる茂みの間に身を伏せて、裏口へと急ぐ。

「っ、待ってよ、蓮子っ、服が——」

「ゆっくりしてる場合じゃないわよ、急いでっ!!」

まだ植え込みの中で暴れているメリーを強引に引つ張ろうとした瞬間——どがんと猛烈な激突音を響かせて、黒い巨体が真上から降ってきた。

「うわああっ!？」

乙女らしからぬ悲鳴と共に飛び退いた私の前で、地面に激突した黒服が、埃まみれの身体を持ち上げる。良く見ればその首

はあり得ない方向にねじ曲がり、手足はがりがりと嫌な音を軋ませていた。

立ち上がりかけた黒服がバランスを崩し、その拍子に取れかけていた首がぼろんと落っこちる。

「……………ひっ!？」

足を転がった黒服の首は、不思議そうに眉を潜め、こちらを見上げる。

「……………っ……………」

立て続けの衝撃に、もはや声も出ない。

しかし、首を失った黒服の身体はそれをもとめせず（少しくらいして欲しくはあったけど、よたよたと落っこちた首に駆け寄るとそれを拾い上げた。

「……………」

自分の首を無造作に肩の上に乗せ直し、折れた花瓶の口をくつつけるような手つきで、ぐりぐり首の破断面をねじつける。数秒もすると、もげたはずの首はあっさりとかくつついていた。

かすかな油の匂いと、小さな機械音と共に、黒服は何事も無かったかのように起き上り、私達を見る。

「うわあ……………」

「蓮子、どいて!!」

いよいよもってどうしようもなくなってきたデタラメ具合に呆然となっていた私を庇うように、隣からメリーの声。

何事かと思えば、メリーは地面に転がっていた植木鉢を重そうに抱えていた。バケツほどはありそうなそれを、ハンマー投げのように遠心力をのせて黒服に投げつける。

「……………」

ものの見事に顔面にそれを受け止めた黒服は、激突の衝撃で近くの物置へと吹き飛ばされた。耳を塞ぎたくなるような騒々しい音があたりに響き渡る。

くつついたばかりの首は、またすばんと景気良く引っこ抜けていた。

よろよろと、園芸用品を掻きわけながら再度首を拾いに向かう黒服の背中を見ながら、メリーはぱんぱんと手の汚れを払う。

「うん。……正当防衛は成り立つと思うわ」

「なんかやたら冷静ねメリー!？」

「だって、夜中に集団で女の子を追いかけて回してるのよ？ どう考えてもあつちのほうが悪役じゃない」

「いや、そりやそうだろうけどさ……………」

なんとまあマイペースな。どこかずれたメリーの態度に、自然と苦笑いが込み上げてくる。

「行きましよ、また追いつかれちゃうわ」

「そうね……………」

走り出した私の背中で、ぱあっと光が瞬いた。上空を周回する黒いヘリコプターから乱れ飛ぶサーチライトと、それを真下

から迎撃するカラフルな光の軌跡。

時折閃光のように赤い輝きが瞬くたび、ばきん、ばしん、と空間がはじけ、光が飛び散る。

あの背中。あの声。私の背中を突き飛ばした誰かの姿が、おぼろげに頭をよぎる。

「蓮子！」

その光に見惚れていた私を、メリーの声が引き戻す。

「何やってるのよ、急いで！」

「分かってるわよ！」

後ろ髪をひかれる思いで走り出した私の背中で、銃撃はなお続いている。

逃げるのに精いっぱいだった私達は、その時、夜空に大きな大きな結界の空隙がぱくんと口を開けているのにも気付かなかった。

(Epilogue.)

散々山の中を歩き、私達が国道沿いのコンビニに転がり込んだのは、夜も明けかけていた朝の5時。

幸いにして店員さんが『それはこんな顔かい?』などと変装を剥がして見せるようなこともなく、ようやく窮地を抜け出した安堵の中で、私達はそのままへたり込んでしまった。

ぼろぼろの服、裂けたストッキング、泥で汚れ手足という私達の格好を見て、店員さんがあらぬ誤解をして警察やら救急車を呼んでしまいそうになったのも御愛嬌であろう。

一夜明け、呼んでもらったお巡りさんと一緒に訪れたお祖父ちゃんの家は、荒らされた様子もなく。私とメリーが慌て騒いで転がった痕跡が残っているのみだった。

もちろん銃撃戦の痕跡も、不審な黒服の男たちひしめく様子も、彼等が乗りつけていたワゴンやヘリコプターも、影も形もない。

何もかも元通りの庭先で、昨日の衝撃体験を力説しようとする

る私達に、お巡りさんはすっかり呆れていた。

せめて、あの黒服のもげた首でもどこかに落ちていれば証明のしようもあったのだろうけど——それはそれで、余計にややこしいことになっていたはずで、もどかしさは募るばかりだった。

悪い夢でも見たんだよ。きつと疲れてるのさ。——などとお決まりのフレーズでと励まされることに釈然としないものを感じながらも、はつきりと言いつ返し返す手段もなく。結局あの夜のこととは全とうやむやのうちに終わらされてしまった。

確かに私達は、メリーの夢の中という形で少なからぬ超常体験をしているわけで、あれが夢の中の出来事ではなかったのだと断言することはできないのだけど。

その後、私達は身元が確認されるまで所轄の警察の中でこつてりとお説教を頂くことになった。

そのおかげで帰りの電車にも乗り遅れ、予定も大幅にオーバーして、翌日の大学の講義まで盛大にすっぱかすことになったのだけど——まあ、それは瑣末な問題ということ。

「……あれ、何だったのかしらね」

「そうねえ」

真面目に思い返そうとしても、なんとも現実味が足りない
MENTAL BLACK
黒服の男達との邂逅。

今にして思えば、彼らが非日常の存在であることは明らかだった。上から下まで黒づくめの男達と言え、宇宙人達とコンタクトのあった人々の前に現れては、その痕跡を抹消して回る「政府」の秘密工作員の象徴だ。

宇宙人の到来が噂された二十世紀半ばに囁かれた秘密組織は、やがてそれ自身が都市伝説化し、彼等が存在するという噂自体が、かえって宇宙人の信憑性を高めることになったという。

「……多分、また会えるんじゃないかしら。海外の方が本場らしいし」

「会いたくないけどね、できれば」

トランクを抱えて呻くメリーに、揃って私も苦笑する。まあしかし、私たちの旅路にトラブルはつきものだ。きつとまた何かが起こることだろう。

空港のロビーに、出発を告げるアナウンスが響く。

——そう。私達は空港にいた。

お祖父ちゃんの知己だという、海外のアマチュア天体観測グループの人たちから連絡があったのが今月の初め。

同じく開発公社から、月の土地問題で接触を受けた彼らの招待を受け、私は海を渡ることになった。無論メリーも通訳という名目で同伴である。

どうやら、世界中の人達に月を買わせた宇佐見教授の孫娘として、しばらくは忙しい日々が続きそうだった。

「メリー、なにかバイトでも探さない？」

「……どうして？」

「月までは無理でも、中継ステーション往復のシャトルツアーくらいならなんとかならないかなって思っただけ。ほら、やっぱ一度は見に行きたいじゃない」

「……物好きねえ」

うんざりとした表情で荷物を抱えながらも、メリーは小さく微笑んでくれる。

そんな彼女の横で、私は満天の星空を見上げた。

そつと、耳の上に両の手のひらを添える。

遠い遠いどこかにいるだろう、彼女達の声が聞こえないかと澄ました耳の先。

あのウサギさんのように、仰ぎ見た広大無辺の宇宙の中央には、今日も大きな月が、丸々と白い輝きを見せていた。

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

銅おりはと申します。このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『ケイヴァーリットの多世界解釈』は、月とその土地権利書を巡る秘封倶楽部二人の冒険を描いた、当サークル十三冊目のSS本となります。

月と秘封倶楽部をテーマにした作品は以前にも書いていますが（冒頭収録の『儚月を臨むブルー・マーブル』がその作品にあたります）、今回はその統編的な位置づけのお話でした。三十八万キロの旅と言いつつ、実際は千数百キロしか旅していませんが（汗）。

どうしても境界や結果がテーマになりがちな秘封倶楽部の物語において、メリーではなく蓮子を主軸にしたお話を書いてみたくて、あれこれと頭を捻ってみた結果となります。

拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

蓮子とメリーが暮らすあの時代がいつたどれくらい未来なのかについてはあれこれと議論がありますが、作中では作劇の都合上、現代とはバラレな世界の二〇三〇年代を想定しています。

昨今の宇宙開発への注目を考えると、案外現実でもその頃には月への再到達と、火星の人類到達が見えている時かもしれません。調べれば調べるほど、一九六〇年代に人類が月に辿り着いていたことの偉大さ思い知らされるばかりです。

さて、今回の執筆にあたりまして、白身氏、仁科氏にはたくさんのアドバ

イスを頂きました。

また、表紙のアイコンは「はつぶんずげ」とのはつぶん様作成のものをお借りしました。この場を借りてお礼をさせて頂きます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願っています。

◆表紙アイコン◆

「はつぶんずげ」と「はつぶん様

(<http://happen.kotonet.com/index.html>)

【奥付】

「ケイヴァーリットの多世界解釈」

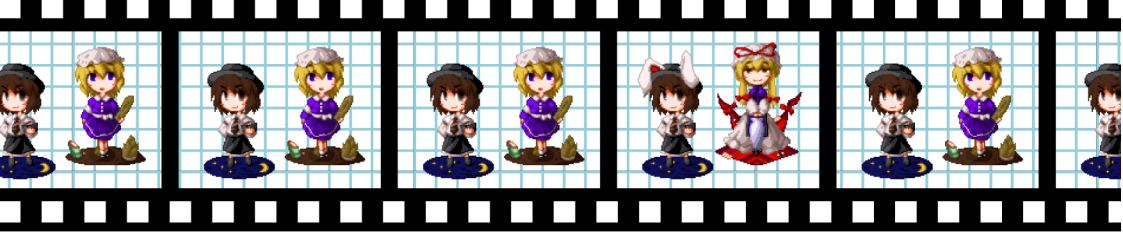
平成23年2月20日 科学世紀のカフェテラス

発行 折葉坂三番地(<http://oruhazakablog28.fc2.com/>)

著者 銅おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 Project」の二次創作です。





東方project Fanbook 2011.2.20 発行：折葉坂三番地

◆表紙アイコン：「はっぴんずザ〜と」はっぴん様◆

